

ミーラ・ウェスティン「ミシカル (神話)」

生き物



アハティ

ヒイシ

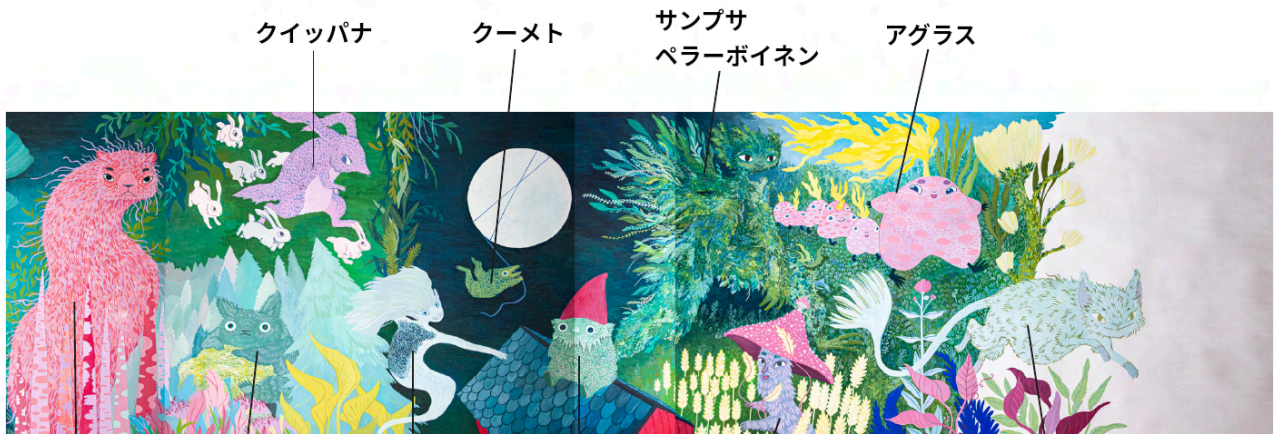
リエッキオ

タピオ

ヴェテヒネン

マーヒネン

ヴィルヴァツレト



クイッパナ

クーメト

サンプサ
ペラーボイネン

アグラス

ホンガタル

森の神

ペッロンペッコ

バラ

アールニ

トンットウ

『Myyttisten jäljillä』

ガッシュ (2020年)

約 100 x 430 cm



アハティ (Ahti)

アハティのことを説明するのは一筋縄では行きません。アハティは一方で水の母と見なされ、他方で魚捕獲器とされています。著作物では、アハティを森の生き物として挙げられている場合もあります。



ヴェテヒネン (Veteinen)

ヴェテヒネンは水の母であり、溺れている人を自分の方に引き寄せると考えられています。水から立ち上がって髪にブラシをかけるキャラクターと呼ばれており、見ると不運を招きます。フィンランドの北カレリアには、泳いでいる人を絞め殺すナッキ (näkki) もいますが、ナッキはヴェテヒネンの新しい名前にすぎないと思う人もいます。溺死させる前に髪にブラシをかけるのを見られることもあります。



クウメト (Kuumet)

フィンランドの民間伝承では、太陽より月の方を信仰する傾向が強く、神話によってはクウメトと呼ばれる生き物を含める場合もあります。クウメトを月を空から引き下ろそうとする生き物としている描き、カヴェと呼ばれる生き物がそれを止めたと言っている詩もあります。しかし、フィンランドの民間伝承において、クウメトとカヴェの持つ重要性についてははっきりしません。



トンットゥ (Tonttu)

ノームであるトンットゥは、フィンランドの民間伝承では家の守り神と位置づけられています。西部フィンランドでは、灰色の服と赤い帽子の一風変わった服装をした小さな老人に見えられていると言われています。フィンランドや北部の他の国々での古代に対する認識では、トンットゥは額の真ん中に目が一つしかないキャラクターで、他の人の持ち物をその所有者に運ぶとされています。



リエッキオ (Liekkiö)

リエッキオは、結婚していない母親から人知れず生まれ、その後殺された子供の霊です。そのため、意地悪そうに泣きわめきながら出没します。墓を通り過ぎる人を追いかけ、聖なる土地に行きたいとか、または少なくとも祝福を得たいと懇願します。その願いがかなうと、その声は消えます。



ヴィルヴァツレット (Virvatulet)

宝物の神々の炎は、朽ちる過程を経て生成された光るガスことウィル・オ・ウイスプと結び付けられてきました。しかし、民間伝承では、ウィル・オ・ウイスプは死者の霊と考えられています。



森の神 (Metsänhaltija)

森の娘は、特にフィンランドの南西部では、前方から見ると魅力的であるが、後ろから見るととても醜いと言われています。森の神は鳥の姿をして現れると言われています。それぞれの神が縄張りを持ち、捧げものが備えられています。



パラ (Para)

パラは家に必要なあらゆる種類のを運んでくれる神と見なされており、役割ごとに異なるパラがいます。たとえば、パンまたは穀物用植物担当のパラの場合、穀物畑を歩き回りながら、自分用の穀物を刈り取ります。牛乳やお金を集めるパラもいて、いつも赤い光りを出しています。



ホンガタル (Hongatar)

ホンガタルはクマの親神です。ホンガタルの名前は、樹齢を重ねた松の木を意味するフィンランドの単語に由来すると言われてきましたが、それは「peijaiset (殺害されたクマに敬意を表して開催された饗宴)」の終わりに、クマの頭蓋骨が松の木の枝に取り付けられたためです。ホンガタルがタピオの娘とみなされることもあります。



ヒイシ (Hiisi)

ヒイシについては、フィンランドのいろいろな地域でさまざまな信仰がされてきました。ヒイシは一方で森をさまよう頭のない小さな生き物と言われていますが、他方で山または死者の住む場所と結びつけられています。ヒイシにはさらに多くの異説もあります。



アールニ (Aarni)

アールニは宝物の守護者と見なされています。この神は、明るく晴れた日や夜、森の中でかびだらけのコインに火をあてて乾かし、艶を出すとその姿が現れてきます。この神は気分がいいときであれば、コインをチャリンチャリンと鳴らすことさえあります。また、夏至の前夜のように、お祝いの夜に現れ、青い炎でその宝物のカビを燃やすこともあります。



マーヒネン (Maahinen)

マーヒネンの特徴は、地上に姿を出すことがないわけではありませんが、地下に住んでいるということです。マーヒネンはアリの形でも現れました。マーヒネンの世界は逆さまになっていると見なされます。つまり、その世界は上下逆さまになっていたり、右が左であったりといった具合です。この信仰は、水面に映った姿に起源を持つと言われていています。水中の世界は上下逆さまになったり、右が左になったりするように見えます。



サンプサペラーポイネン (Sämpsä Pellervoinen)

サンプサペラーポイネンは、春に目覚めるだけでなく、他の植物、特に穀物用植物を目覚めさせる最初の植物です。サンプサは樹木のない島で冬を過ごし、北に逃げ込むと言われていています。サンプサは森林栽培者であると見なされたり、野原の植物の世話係だと見なされたりしています。



アグラス (Ägräs)

アグラスは初めは豊作の力と理解されていたふしがあり、植物の神秘的な変化として現れます。二重ターニップの形をとって現れると考えられることもあります。アグラスはまたこの神の姿を体現していると見なされてきた布、麻、ジャガイモ、特にこれらの特別な構造とつながりがあります。



ロンゴテウス (Rongoteus)

ライ麦はフィンランドの穀物用植物の中で支配的な地位を占めていたため、最初に口にされた穀物用植物の神がライ麦の神、ロンゴテウスであるというのはいり得ることです。入手可能な情報が少ないため、この神の姿がどのようなものであったのかとか、その名前がどこから派生したのかといったことを判断するのは困難です。あるテキストでは、ライ麦の中に住んでいる「ライ麦男」がいて、人びとが彼に豊作に求めていると記されています。



ペッロンペッコ (Pellon Pekko)

フィンランド・エストニア語ではペッコと呼ばれるペコは、大麦と大麦の飲み物の神です。ペッコはもとは大麦を意味するゲルマン語の単語の借用語であり、ペッコが初めは大麦の擬人化であったことを示しています。



タピオ (Tapio)

タピオは森と見なされ、詩では擬人化されているように見えます。タピオに関する著作物によると、森はかつて生き物として呼ばれていたため、タピオを森に住む生き物と描写する詩は誤解を呼ぶという研究者もいます。詩の中にはタピオを女性として描いている例がある、と記している著作物もあります。



クイッパナ (Kuippana)

クイッパナは森の王であり、狩猟の幸運と獲物をもたらします。名前は肉の運命と甘党を意味する言葉から派生しているようだとされていますが、この神にはタピオなど他の多くの名前が使われてきたのも事実です。ですから、このキャラクターが森そのものであるタピオと同じでないとは言えません。

全作品

デジタル印刷 (2020 年)

29.1 x 29.1 cm

原画 2019~2020 年

ミーラ・ウェスティン



ミーラ・ウェスティン (1987 年生まれ) は、ヘルシンキを拠点に活動するフィンランド人イラストレーター。キャラクターデザイン、エディトリアルイラストレーション、パターンや本のデザインなど、幅広いプロジェクトに取り組む。ウェスティンは特に、架空の生き物と空想の世界を可視化することを楽しむ。2020 年にフィンランド・ジュニア賞を受賞した児童文学書「ラジオ・ポポヴ」のイラストを手掛けた。フィンランドイラストレーター協会役員。2020 年、アールト大学美術デザイン学部ビジュアル・ナラティブ (ビジュアル・コミュニケーション・デザイン科) 修士課程卒業。修士論文テーマはフィンランドの神話的存在の可視化について。